



再

會

夕

一

その日、私は飛んだ。

「ごめんなさい…。」

思いを馳せながら一人、カーテンの隙間から外を覗く。病室のような簡素な小部屋の窓からは都会の雑居ビルが見える。私はきっと世の中に負けた。多分誰のせいでもないけど、自分に負けたなんて思いたくない…でも、私には、もう…。窓を開け、その縁に足を掛けた。

「唯！セージ君来た…。」

奥から女が顔を出し、後から声を掛けられた。

「ちょっと！何やってるの!？」

見つかってしまった。女が窓から私を引き剥がし、片手に握られていた物を奪い取った。

「返して…。」

「ダメ！なんでいつも…。」

「だって、伸びてたから。」

「だからって、足の爪外に降らせないでよ。」

女は私から奪った爪切りをポケットに仕舞った。

「それ、私の!」

「仕事終わりに返すって。それより、セージ君来たから早く行って。」

「はい…。」

私は部屋を出て外に向かった。狭苦しい廊下の先には、同じく狭苦しい階段が繋がっている。階段を降りた脇に『コスチュームマッサージAPPLE』という看板が出ている。

「おう。」

分かりやすいほど分かりやすい、ホストな男が逸早く気付いて声を掛けてきた。

「はい、今月分…。」

封筒を差し出す。男が封筒をひったくり、中を確認する。びくびくしながらセージと封筒を見ていた私は目を逸らして思う。…ホント、もう、お金がない。

「はい、確かに。頑張ってるじゃん。で？今日はどーなの？っつーか来いよ。」

「…今日は、ちょっと…。お金が…。」

「はあ？そんなのまたつけときゃいーじゃん。今日指名1本指名足んねーんだよ。」

「えっと…、でも…。」

私が間誤付いていると、盛大な舌打ちが聞えた。

「ああ、じゃいーよ。マジ苛つく。」

「ごめん！あ、あ、早く終わったら行く。頼んでみるから…。」

セージは急に笑顔をつくり、優しく親しげに私の肩を抱いた。

「ジョーダンだって。いや、お前はホントにかわいいな。じゃ、店で待ってっから。っつーかお前終わったら電話しろ。迎えに来てやるよ。俺直々に。」

「あ、うん…。」

「そんだけかよ。」

「ありがとう…ございます…。」

「よし！じゃ、オシゴトがんばってー。」

セージと呼ばれる男はさっさと行ってしまった。ほっとしながら見送る私は思う。今日、私は、トブ。だから店には行けない。さよならセージ。払えなかったツケ、被らせる事になるけど、ごめん。

リュウ

店内に戻ると、私はぼうっとTVを見んでいた。番組との合間に流れるニュースも、この職場の息抜きにはかかせない。しかし、耳に入ってはいても、頭に入る事は滅多に無い。

“…バットのような鈍器と見られ、2つの事件は通り魔の…”

後一時間して仕事が終わったら、そそくさと飛ばなくてはならない。大仕事が待ち受けている私にとっては、赤の他人の殺人事件などどうだって良い。

「どーしたんっすかぁ？」

隣に座っていた女が必要以上に近付いてきた。その女のふわふわに巻かれた長い黒髪が私の肩に触れる。

「え…、いや、別に…つつーか寄り過ぎ、うっとーしいなあ。」

肩に触れていた髪を払って、自分の髪に手をやった。染め直さなくてはいけない髪が気になる。でも、美容院に行く金さえ、今の私には用意できない。

「だって、やっぱ天然ものは違いますよね。」

女が私の胸を凝視している。

「なんだ、それ。…ああ、そっか。やっぱ偽モンは違う…。」

「そうそう。高かったし。しかもメンテが大変ですよ。」

と言いつつ女は自分の胸をつつく。豊胸手術をした胸は、やっぱり普通とはちょっと違う。

「そこまでして欲しいもん？」

「ギリAの方々にそれ言ったら殺されますよ。」

「でも、大きさじゃないってよく言うじゃん。」

「形が認識できる大きさからの話題っすよ。それ。」

「そんなののためにココ入ったんでしょ？なんかなあ…」

「どの道見せるためにやったんだからいいんだって。コスプレするにも乳ないと様になんないんだわ、コレが。でもまだ2ヶ月だからたまにちょっと痛いんだよねえ…。あ、タメ語っちゃった。」

「いいよ、今更。大体、凛はいくつよ。」

「二十三…。」

私が凛と呼んだ女は厚めに切り揃えた前髪で自分の顔を隠しつつ、小さい声で答えた。

「うん。店ではね。ほんとは二十…」

「よ～ん！！もうすぐゴ～。あはは」

「おばちゃんだなあ、笑うなよ。笑うトコがおばちゃん。」

「ゆいっちは？」

「二十二。」

「うん。店ではね。ほんとは二十…」

「二。さば読む歳じゃないから。まだ。」

「なんだよお。つまんない。ねえねえ、ゆいっちはなんで入ったの？」

「それは…」

言いかけた時、ドアが開いて奥から声がかかった。

「唯～。指名入ったよ～。」

「はい。今行きます。新規ですか？」

飲み物を冷蔵庫に仕舞いながら聞く。

「んーん。スズキさん。」

「え、またあいつ？」

名前を聞くなり、凛が眉を寄せて言った。しかし、常連と言うのは金になる。金のためにココで働いているのだと思いき直したのか、凛は私が部屋を出ようとしたところで、先程の質問の答えに話を戻した。

「…で、それは、何！？」

「凛よりマシな理由。あ、術後二ヶ月は運動しちゃだめって言われなかった？無理しない方がいいよ。」

「はい。って、なんで知って…」

私は凜が新たな質問に入る前に、部屋を出る。

「あ、がんばっ…。らなくていいぞ～！！」

ドア越しに凜の声が聞えた。言われなくても頑張る気などない。頑張った事なんか一度もないし…。いつもの部屋にいつもの人。お座なりの接客をしながら私は考える。もう二十二歳になってしまった。サバを読むほどではないが、若いとも言えない。本当なら田舎で大学を卒業している歳。ホストに貢ぐ金を稼ぐのどこがマシな理由だろう。実家は、広島にある。便利と不便が半々の、いわば中都市だ。父は美容整形外科クリニックで成功した強く優しい人で、母は看護師をしていたところを父に見初められた。そういう表現がぴったりの楚々とした美人だった。小さいときから父も母も大好きだった。特に父は私にとって理想の存在。自分は絵に描いたようなファザコンだったと思う。でもまあ、人並みに恋もしたし自分で言うのもなんだが、成績は良かったし顔も良い方でヒネくれもせず育てたので、小中高とよくモテた。しかし今思えば高校入学から少しずつ、家は冷たくなっていたのだと思う。父は何やら忙しそうで、夜中目が覚めて台所に行くと、母が一人酒を煽っているところをよく見かけた。父は私達のために頑張ってくれているのに、母はなんて心の弱い人なんだろうと、疑いもせずに心の中で母を責めた。それでも、反抗らしい反抗をすることもなく、勉強に没頭し、気付けば県立大の医学生になっていた。父のようになりたかった。父は相変わらず不在が多かったが気にならなかった。でも、あの日…

トウボウ

“プルルル…、カチャ…”

母が電話を取る。私はその側で夕飯の用意を手伝っていた。

「はい沢木ですが…。ええ。わかったわ。」

「ただいま。」

「お父さん！おかえりなさい。今日は早かったね。」

「ん？あ、ああ。」

「今、帰ってきました。…ええ。…あなた。」

「なんだ？誰からだ？」

「日之瀬さんとおっしゃる方です。」

「ヒノセ…？…もしもし、沢木です。…はあ。あつ、あんた…え…。ああ…。」

帰ったばかりで、急に電話を変われた父は妻を凝視し、そのまま受話器を床に転がした。妻を見つめたまま、微かに震えている。二人の間に私が入る隙間は無かった。

「…知ってたのよ。もう、我慢できなかった。」

母親は引き出しから封筒出し、夫に投げた。封筒には『別れさせます！HINOSE探偵事務所』とあるのが見えた。慌てて夫は中を見る。中身は写真、それが落ちて散ばる。夫は土下座した。

「悪かった！すまない。」

「なに？どうしたの？お父さん、なにやって…。」

「浮気よ。5年前からね。いつかは戻るだろうと…。でももう待てなかったの。ごめんね、唯。」

あの時、父は泣いていた。母は涙一つ流すことなく、平伏す父を眺めていた。私は黙ったまま風呂に入り、身支度をして、始発の新幹線に乗った。新宿をふらついているところをセージというホストに拾われ、後はよくある一連の流れの末、1年後には立派な風俗嬢の出来上がり。そして、今日また、私はトブ。ツケを残したまま。仕事を終えた私はロッカーームでポストンバッグを掴んだ。あの日と同じように逃げるのだ。職場もセージも私の家を知っているから、今日付けでアパートは引き払った。行く当てはない。数万の逃走資金のみが命綱だ。歩いて東京駅まで行き、鈍行に乗って行ける所まで行くしかない。

バット

公園に差し掛かり少し休もうか迷っていると、背後に不振な気配を感じ、思わず立ち止まった。頭に、ふとTVのニュースが甦った。“…事件は通り魔の…”。身震いした後早足になり、振り返りつつ、走って木陰に隠れる。金も行く当ても無くても、死ぬのは嫌だ。どうやって生きていくか分からなくても、生きてはいたい。

“ピルルル…”

「うわっ…。」

突然の携帯にあたふたしてるところに、横からセージの顔が現れた。

「やっば、唯じゃーん！なにになに？なんで隠れてんの？」

「い…いや…。」

逃走から二十分と経たない内に、いきなり見つかってしまった。

「お前さあ、終わったら電話しろつつたじゃん。」

「…ごめんな…」

「謝ってすまねえんだよ！」

セージが唯の腕を掴む。物凄い力と迫りに声も出ない。先程とは逆に通り魔の方が良かったと思う程だ。通り魔はすぐに殺してくれるが、セージなら生かさず殺さず、半永久的にいたぶりながら金を無心するだろう。

「おめえが来ないせいで俺の名前に傷がついたんだよ。」

私を揺すり、突き放す、ボストンバッグが転がった。

「罰金払って貰う…。なんだよこれ。」

セージがバッグに気付きそっちへ近付く。

「あ…」

私が止める間も無く、セージはバッグを探った。中身を見て逃走に気付かないはずは無い。

「…てめ…、トブ気か！？コラ！！」

セージは立ち上がり、私に一步近づいた。

「いくら残ってっと思ってんだよ！」

カッとなったセージが殴りかかってきた。

「ひっ」

殴られると思えば身を竦ませた瞬間バフッと鈍い音がし、瞼の隙間から目の前でセージがうずくまっているのが見えた。その後に足が二本…。視線を上げるとその後ろにバットを振り切った姿勢の凜が見える。

「りっ…！なんで！？」

もう訳が分からない。

「いっ…てえ…！！誰だっ…」

セージが振り返り立ち上がる。が、その前に凜はサッと私の方へ回りこんでいた。

「うわっ！はい！！」

立ち上がったセージに今更ながらに驚きつつ、凜が私にバットを渡す。

「ええ！？」

頭を押さえてふら付きながらセージが近付いてくる。さっきより目が怖くなっている。異常な状況に、私の恐怖は増した。やられる。

「ゆいっち！殺される！やれ！」

セージが私に手を伸ばした瞬間、凜の声をきっかけに唯は目を瞑ったまま、思い切りバットを振った。鈍い音と、バットが何かに当たった感触がする。

「まだ！！」

凜の掛け声で更にバットを振る。鈍い音。もういいだろうと、目を開ける寸前に凜が唯からバットを奪う。

「おまけだ！！」

凜がバットを振る瞬間、私は目と耳を覆った。一呼吸置いて、恐る恐る目を開ける。と、ぐったり転がったセージがいる。どうしよう…。動けないでいる私を他所に、凜はセージの頭部に駆け寄り頸動脈で脈をとっている。

「ふう…。グッジョブ。逃げるよ。」

「は？」

「逃げるの！！」

凜がボストンバッグを拾って私に押し付け、走り出す。

「ええ！？」

と言いながらも私は凜に付いて走り出した。凜はバットを持ったままだ。私は凜の背中だけを見て走り続けた。振り返るとセージが居そうで、怖かったからだった。しかし、そんな事を考えられたのも最初のうちだけで、後は付いて行くだけで必死だった。息が続かない。待ってと言う事すら不可能になった頃、ついに凜が止まった。息を整える。人気の無い大通りのガードレールに縋ると、自分の心臓の音が鼓膜を振動させている。こんなに走ったのは高校以来だろう。私、結構速い方だったのに、凜って一体…。なんだかちょっと悔しい。そう思って顔を上げると、凜は息切れしつつも笑顔だった。

「はぁ…Yeah！」

などと楽しそうに凜が笑い出す。全く、意味が分からない女。

「はぁ、で…？あれって…し…死んでたの…？」

凜はチラッと唯を見て笑うのを止め、呼吸を整えてから言った。

「…通り魔は1回ならバレナイってお父がよく言ってた…」

余韻を持たせて呟く。

「あれは多分…」

どういう意味か考えて、私ははっと息を飲み、凜が言い終わらないうちに、

「いい！やっぱいい！聞きたくない！」

耳を覆った唯を見た凜は大声で言い始めた。

「とーおーりーまーはぁああ！！」

唯は指で耳を塞ぎ、

「あー、あー、あー」

自分の声で、凜の声を掻き消す。

「うわぁ、古典的だなぁ。ねえねえ、逃げるの…」

「あー、あー、」

「もう言わないって！じゃなくて、逃げるのって楽しくない！？」

「…ん…」

何を言ってるんだか、この女は…。とは思ったが、しばし考えてみた。確かに正直楽しいというか何というか…。しかしこれは、興奮状態になった時に脳が出す、アドレナリンと、運動によって出るエンドルフィンの作用。

「なんか、やったぜって感じ？」

更に同意を求めてくる凜をおかしな奴だと思いながらも、でもまぁ、そういう脳内物質の加減で、人間は感情を決めるわけだから…。

「…確かに…、ちょっと、た…のしい。かも…？」

仕方なく、正直に言ってみた。

「ねー！走るの楽しー！いえーい！…ほら、ゆいっちも。」

この状態をランナーズハイと言うって事は、このコに言っても無駄だろう。一応助けてもらったみたいになってるし、合わせるか…。

「い…えーい！」

口に出してみると、意外な事に面白くなってきた。

「いえーい！！」

何度か繰り返すうちに、なぜか二人共大笑になった。それぞれ細かいところは違っても、同じ人間の感じるところなど、所詮似たり寄ったりだ。

「ん…？」

私が急に近づく音に気付いた。

「ははは…は—あ。ん？なに？」

「やばっ。」

今度は私が走り出す。と共に遠くでパトカーの音が響いた。

「すごい耳！…って、おーい！違うよ！私ん家こっち！」

私は引き返し、二人してまた走り出した。

フタリ

ドアに鍵をし、チェーンまでしっかり掛ける。

「そんなことして意味あんのってくらいボロい家なんだけど…。」

「だって貧乏なんだもん。適当に座るなり何なり。」

凧はクーラーボックスを開けて指を差しながら言った。

「なんか飲む？酒？茶？炭酸？水？コーヒーとかもあるけど？」

「水！…ってか冷蔵庫もないの？」

「うん。売っちゃた。」

紙コップ二つとボトルをテーブルに置く。水を注ぎ終わると凧は座り、バットを磨き始めた。私はとりあえず水を飲んだが、クーラーボックスに入っていたとはいえかなり温い。

「あー疲れた。今何時？」

「時計後ろ。」

凧は振り返り卓上時計を見る。午前五時。仕事柄、この時間に起きているのは珍しくない。横に小さい写真立てを見つけて手に取った。幼稚園児くらいの子を抱きしめるようにして小学生くらいの子が笑っている。

「で？何時だっ…」

バットを磨く手を止め時間を聞いた凧は、私が写真を見ていることに気付いて動きを止めた。

「これ…」

「…なに…？」

「妹？」

「…まあ、ね。なんで聞くの？」

「似てない。妹のがかわいい。」

「はあ！？あたしのがかわいいって！」

私から写真立てを取り上げ、じっくり見直している。

「…うーん、そうでもないか…。」

「仲良かった？」

「…小さい時は。色々あって、大きくなってからはあんま会えなかったから。」

珍しくまともに答えたので、私は聞いてはいけない事だったのかと気が付いた。

「ごめん。」

「ははは、いーってことよ。色々あんのはお互い様でしょ？」

「本当にねえ。…って、…っと言いますかね、そういえばなんであそこに居たわけ？そうだよ、忘れてた。なんでよ？」

「それは…」

「タイミング良過ぎだし、大体なんでバットなんか…」

「…実は…例の通り魔…」

バットの柄をぎりっと握り直し、私から視線を逸らした。

「まさ…。いい！聞かなきゃよかった！いや、聞いてない！ウチはなんも聞いとらん！」

「…ふう、さあてと、寝るかあ。あ、そうだ。明日もう仕事行かないんでしょ？」

「え…うん。」

「あたしも行かないから。」

「ああ、気い使わなくていいよ。」

「じゃなくて、あたしも辞めるの。」

ヨクジツ

翌日私は日差しに起こされた。布団横にして雑魚寝なんて、修学旅行以来だよ…。横を見ると凧はまだ寝たままだ。もう昼…。なんとなくTVをつけようとするがリモコンはなく、仕方なく主電源を押す。

“…です。次のニュースです。今日未明、東京都新宿区西新宿二丁目にある新宿中央公園で…”

昨日の公園の事だと思った途端、ブンとTVが消えた。

「あれ？」

再びTVをつける。

“…殺と見られており、警察は先…”

ブンとまた消えた。また付ける。

“…人事件の新たな被害者と…”、

やはりまた消えた。私はTVをつけようとしながらも振り返った。凧がリモコンをかまえている。

「お前かい！」

「見つかったちゃった。」

寝起きのぼさぼさ頭で可愛ぶっている。

「遊ぶな！」

「だってー。見てどおすんのお？」

「どおすんのもって…、把握しとかなきゃ、まずいでしょうが！」

「いーよ。大丈夫だって。自分がしでかしたこと確認したところで、落ち込むだけだって。死んだらお終い、ハイ、さよ～なら～。生きてるウチらは過去を引きずらない。ね？」

「ね？って、よくそんな…。意味わかんないし。」

「そうかなあ…。」

勢いとはいえ、やってしまったことに変わりはない。セージの顔が浮かんだ。

「はあ…セージ…ごめ」

「ほら、泣いちゃうじゃーん！」

「泣いてないですから！」

「あんね、最高の戦略は、戦略を持たないこと、なんすよ。パターン化すれば必ず先を読まれる。ま、そういうところから、一回の通り魔は捕まり辛いんですなあ。所詮、同じ人間の考えることなんてなあ高が知れてるわけっすよ。だから、余計なことを考えられないように、情報は知らないほうがいいってことなの。」

「…はあ？変な講釈垂れないでくれる？しかも聞いてないし。」

「そうだ！変な講釈垂れたらおなかすいちゃった。」

クーラーボックスを開ける。つくづく本能に忠実な女…。私は溜め息を付いた。

「ええっと何食べたい？」

「ああ、何でも。」

「そっか、あたしも。じゃ、作って。」

「ウチがかい！」

「ゆいっち大好き。」

「で、何があんの？」

「…酒、茶、炭酸、水、コーヒーなんてのも…」

「…。何もないじゃん…。」

凧を睨みつける。

「ごめんなさい…。」

バット 2

「外に食べに出るのは、いいよ。」

「うん。おいしいねココ。」

「でも、これは…。」

下瞼をひく付かせている私に、凜はきょとんとしていた。

「変装じゃなくてコスプレですから！」

人の多い普通のカフェで、二人共捕まらない程度におかしな格好をしている。

「怒ったー。あ、鼻から麺出てるよ。」

「えっ」

「うっそ～。いあやあ、似合ってるよ～。やっぱ天然美人は違うね～。羨望の的！」

「目立ってどうすんじやい！」

「おお～。張るねえ、声。」

「何これ！？めっちゃ座りにくいんですけど！」

背中に付けさせられた、針金と透ける布で出来た物体を引張る。

「羽。だって妖精さんなんだもん、私。しかもなんだかんだ言ってここまで着てきたじゃ～ん。それにこれ、ゴスロリとロリだよ。コスじゃない。」

「なんでウチまで…。全くあんた幾つだと…。あんたねえ、ニキビと吹き出物の違いってわかる！？」

「え、何、なに？」

「二十歳を境に呼び方変わるの！コレも二十歳過ぎたら立派なコスプレ！学校卒業したのに制服着るのと一緒！…ちょっと！なんで私の食ってんのよ！」

「いーじゃーん。同じ釜の飯～。オナカマ～みたいな。」

「意味が分からん！荷物持ってきて良かった。着替えてくる。」

席を立ちかけて、私の体は止まった。

「…あ。」

私は凜の後方、店の外に怪しげな男を発見した。ゆっくり座りなおす。

「？なに…。」

振り返ろうとする。

「動くな！！」

顔を隠しつつ言う。

「…トイレ。」

「いっといれ。」

くだらない駄洒落は完全無視して、凜の手を掴んだ。

「一緒にいくの！」

「やだなあ、連れション？やっぱあたしのこと好きなんじゃーん。」

「煩い！いいから、荷物持って。」

「えー。」

「早く！」

ぐずぐずする凜を無理矢理つれて、トイレに入る。

「外に変な奴が居る。」

「まじで！？ゆいっち変なの集めるの得意だね。」

「チッ。」

凜のお気楽さかげんに舌打ちする。

「きっと警察だって。」

「じゃ、逃げるの！？」

「当たり前でしょ！？」

「よっしゃ！まかせんしゃい！！」

「どうするの？」

「普通に出る。」

「はぁ！？」

「今着てるの、脱いで。交換する。」

衣装を換えると、本当に普通に店を出る。しかし、私だけがまた店内へ戻り、出入り口で隠れて待機している。凜がダッシュで路地に入ると、怪しい男はその後を追った。ちょっと、どうする気？私は自分の前を男が通り過ぎてから覗き見る。と、男が路地に入った瞬間、凜が走って出て来た。

「行くぞ！」

と、私の手を引く。

「ええ！？」

引っ張られつつ走り出す。角を曲がったところでタクシー拾い、乗り込む。

「どうなったの！？」

「武道は得意なんだけど、今回はこれで…。」

薄いピンクにフリルとリボンがふんだんにあしらわれた可愛い袋。しかしなんだかやけに長細い。こんな晴れた日に傘なんて…。と私が思っていると、凜が袋の上からチラッとバットを覗かせた。

「またかよ！傘じゃないんかい！あぁ、もう。罪状が増える気がする…。」

「私は大丈夫。」

と言ってスカートをひらつかせる。さっきまで私が着ていた服だ。

「そっちのが似合う～…って、これじゃ私がやったことになってんじゃん！ダメじゃん！」

「やっぱ東京は危険だな。逃げるか。いい？」

「…他に、ないでしょ。」

「すいませーん。やっぱり東京駅丸の内口までお願いします。」

「い、いきなり行くの！？」

「いって言ったじゃん。家に置いてきた分の荷物は諦めて。」

「じゃなくて、この格好で！？」

「だめ～??」

「ダメ！！」

アンゼン

大阪に着くなり夕飯ををねだる凜に根負けし、私達はお好み焼き屋に入った。広島のと違うけど、懐かしい味がした。東京にもお好み焼き屋はあったけど、家出してからなんとなく口にするのをためらっていたものだ。

「やっぱコレだよねえ。」

「ねー。うま。つつーかさあ。」

「なにになに？」

「それ、バット、いつまで持ってんの？」

「このコと私は一心同体なの。」

「なんか…逸話でもあるわけ？」

「逸話ってゆーか、まあ竹馬の友つつーか、ん？竹じゃないから…」

「意味間違ってるし、そんなことは聞いてないし。」

「いや、だからね。憧れつつも、違う生き方になってしまってるところがミソ。」

「はぁ？」

「うーんと、打つために作られたコイツは、つまり、自分から物にぶつかって跳ね返すために作られてるわけね。だから、ぶつかってくのに必要なものだけで出来てんの。すごくない？考えた末に超シンプルなわけよ。そーゆーところが、いらんもんばっか身に付けてって、ぶつかってかない自分とは正反対で、なんだか手放せないんだなあってコレが。」

「ああ、豊胸とか、無駄なもん付けてるもんねえ。」

「ゆいっち、キツイなあ。」

「そんな事、いつから考えてんの？」

「うーん、小学生の時はすでに。」

「へえ。そういう事考える小学生だったんだあ。」

「すごい！？」

「暗い！！」

「ぎゃふん。」

「あんた友達少ないでしょ？つつーかいないでしょ？」

「そんなことないもん！」

「じゃあ言ってみ。」

「……………ゆいっち。」

「ほらね。私は友達じゃないから。いないってことじゃん。」

「しどーい。」

「どーせ、家にずっといて、漫画とかゲームしてたりばっかなんでしょ？」

「ええ！？すごい、ゆいっち、なんでそんなことまで。でもそれだけじゃ…」

私は目の端に何かを捕らえた。

「見られてる…。」

「やだなあ、ゆいっち自意識過剰一。」

「チッ。違うわ！男だよ！カフェの！こんなとこまで…。」

「あらら。うーん。まだ食べきってないのにい。」

「もう駄目か…。」

「まあ、まかせて。じゃ、今度は^{いにしえ}古のコント形式で。」

私達はレジに向かい、店を出た。男はすぐにレジへ行くが、すぐに出られずレジ係と揉めてもたついている。私達は近くの電信柱の影からそれを覗いた。

「おお。大成功。」

「これって、微妙に手の込んだ食い逃げじゃあ…？」

「まさか私も本当に『あそこにいるお父さんが払うんで…』が、通じるとは思わなかった…。」

「思ってたなかったんかい！」

「日本の安全神話は健在か。…さて、先を急ぎますか。」

「どこに…ってか、どうやって行くの？電車はまたつけられるかも。」

「ヒッチ。」

「なに？」

「ヒッチハイクで、博多まで行くか！」

「か！って…、車つかまるの？」

「うん多分。」

「女二人でヒッチなんて、危くない？」

「危ないけど、ある意味今の私達のが危ない奴だし、他に足のつきにくいのって、徒歩かチャリくらい。…歩きたいの？」

「うっ…。仕方ないか…。」

トモダチ

いくつかの車を乗り継ぎ、二人は岡山県内のサービスエリアまで来ていた。深夜の為か車は少ない。凜がトイレに行っている間に唯はコーヒーを買いに行き、財布の中身を確認した。

新幹線に乗ったせいで後3万ちょっとか。でもあのコほんとに貧乏そうだし…コーヒーくらい買ってやるか。

「おまたせ〜。」

「はい。コーヒー。私もトイレ行くから、持ってた。」

「ありがとう！ゆいっち最高！」

缶コーヒーごときでこんなに喜ぶなんて、どんだけ貧乏なんだか、ただの馬鹿なのか…。多分ただの馬鹿だな。嬉しそうにコーヒーを飲み始める凜を残してトイレに向かう。私が個室に入ると、手洗い場で女二人が話しているのが聞こえた。

「そういえば、あの通り魔ってどーなったか知ってる？」

「あー、よくわかんないけど、もう大体の見当はついてるらしいよ。」

足音が遠ざかるのを待って、人気を気にしつつ私は急いでトイレを出た。

「やばいって！」

「うおう！は、早かったね。」

「驚きすぎじゃない？」

「空想中で…。」

「またくだらないこと考えて…。それより、さっきトイレで通り魔のこと話してる人が…。」

「どこの通り魔？」

「はあ？あんた、本人でしょ！？」

「だから、どこって言ってた？」

「…。」

「ゆいっちー、ここ岡山だよ？通り魔なんてどこでもいるって、やっぱり自意識過剰〜。」

「…ムカつく言い方。」

と言いながらも、少し安心して凜の隣に腰を下ろした。凜が私の分のコーヒーを手渡す。

「いい夜だねえ。店いた頃は夜空なんかまともに見なかったよね。」

「確かにねえ…。」

見上げると星空が広がっていた。

「ね、小さい時は夜外に居ると、なんだか怖くならなかった？」

「ああ。怒られて外に出された時とか最初は怖かったなあ。でもすぐ慣れてそのまま遊びに行っちゃって、更に怒られたりしたよねえ。」

「それはない。」

「すみませんでした…。」

「あ、良くある話だけど、幼稚園入るか入らないかくらいの時にかくれんぼしてて、遠くに行き過ぎて迷子になっちゃったんだよね。どんどん辺りは暗くなるし、まじでこのまま死んじゃうんじゃないかと思ったりして…。」

「あー、疲れてもう歩けないしね。」

「そうそう。」

「そのうち寒くなってきたりして。」

「うんうん。」

「…で、死んじゃった。」

「死なんわ！生きとるっちゅーねん！」

「お化けが怒る〜。怖い〜。きつとくる〜。」

げらげら笑う馬鹿を睨む。

「んで、どーしたの？」

「……。」

「も～、ごめんってばあ～。ちゃんと聞くから～。」

凜が体を摺り寄せてくる。黙っていると更に鬱陶しい事になりそうなので、私は話を続けた。

「はあ。…それで、泣き始めたら、草むらから男の子が出てきて、見つけて助けてくれた。」

「オトコの子？」

「そう。その頃近所にいた野球少年。ひーくん…だったっけ？まいーや。十歳くらいの子で…。あー思い出した！よくピンポンダッシュとかしてた。一緒に。」

「…ふーん。楽しそうだね。」

「うん、あ、でも、知らないうちに引っ越してたんだよね。確か。今どこにいるのかなあ。結構かっこよかったんだよなあ。」

「…こんななってるかもよ？」

と、自分を指す。

「あんた女じゃん…え！？オカマ！？」

「女の子だもん！おっばいあるもん！」

「ニセモンでしょ？」

「…。じゃあ…」

凜が下を脱ごうとする。

「やめんか！いい！もうわかったから。はいはい、女の子。わかってます。」

「サジ投げるー。」

「ああ！もう、面倒くさいなあ、あんたは！ほら！車来たよ！さっさと動く！！」

「はーい。ゆいちーん。待ってよー。」

ワスレモノ

広島県内に入ると、またもよおした凜のせいで、サービスエリアで下ろしてもらった事になった。

「ありがとうございましたー！」

「あ。」

実家の近くだ…。体が微かに緊張した。凜が振り返る。

「何？」

地元…なんて事言ったら面倒な事になりそうだから止めとこう…。

「あ、あと少しだね。」

「うん。」

「結構かかるもんだよね。」

「うん。」

「博多って初めてかも。」

「うん。」

「あんた、トイレ行かないの？」

「うん。」

凜が下を向いたまま答える。

「どうしたの？なんか具合悪いの？あんたお菓子ばっか食ってるから。」

「うん。」

テンションが低すぎる。明らかに様子がおかしい。

「…ちょっと、ほんとにどうしたの…？」

「ねえ。博多着いたら、どうするの？」

「え、…別に考えてないけど…？」

「じゃあ…、また、ふらふらして、風俗？」

「何、それ…。」

「その時良けりゃいいんだ？ああ、またホストに捉まるとか？」

全身の毛穴が開く感じがした。仲間だと思い始めていた相手にいきなり攻撃され、私は傷付くのを乗り越えて切れた。

「ちょ、だから、なんなの、その言い方！？何にも知らないくせに…。」

「見ればわかる。どーせただの家出でしょ？逃げたんでしょ？夢があって東京来た奴はもっと違う。大体夢があったって、しっかりやれてる奴なんて少ないのに。」

「はあ！？何が言いたいんだよ！？」

「だから、そんなまんまどこ行ったって、結局変わらないってこと！」

「ちょっと！そういうあんたこそ、やりたい事やったツケが払えなくて、結局風俗でしょ！？二十五にもなってふらふらしてんのはそっちじゃない！！」

「二十四！！まだ二十四です！！」

「いーわよそんなことどっちだって！大体、あんたのせいでここまで追われる羽目になったんじゃない！迷惑！ほんとと迷惑！！…あー、もう嫌だ。どっか行って。」

「ほんとにいーの？一人でヒッチは危険なんだからね！？」

「煩い！良いも何も、喧嘩吹っ掛けたのはあんたでしょ！あーほんとどっか行って！早く消えてよ！」

「わかりました！さようなら！」

凜が走って駐車場に消える。

「まじむかつく！…あ…」

目線を落とすと、バットがぽつんと残っていた。

スリ

そのまま残って数時間、夜も明けてきたが凜は戻ってこない。怒りはもう冷めている。確かに考えてみれば、凜の言う通りだった。でも、なんで急に…。

「…もう！結局探さなきゃいけないの、私？」

ぶつくさ言いながらサービスエリアの隅々まで探しても、凜は見つからない。

「何？マジでいないの？最悪…。」

ここまでは凜に付いてきただけで、いざ自分がやるとなると、どうしていいか分からない。まわりの車を見る。

「一人でヒッチは…危険、だよな…。」

途方にくれるって、正にこれって感じ。そんな事を思っていると、なぜかタイミングよく、タクシーが通りかかった。

ああ、良かったあ…。走ってタクシーを止める。

「すみません。博多までって、いくらぐらいですか？」

「ええ！？お嬢ちゃんそりゃアンタ、十万はかかるよ。」

「そうですか…。あ、ちょっと待ってくださいね。」

有り金で行けるトコまで行くしかないな。確か3万はあった筈…。と、財布を覗くと、3万が消え3千円のみが残っている。

「うっそ…！やられたー！！」

ゴドウコウ

インター出口で、私はタクシーを降りた。

「ごめんねえ。お嬢ちゃん。送ってあげたいけどウチも商売だからここまでしか…。」

「あ、気にしないでください。ありがとうございます。」

去って行くタクシーの後姿を切なく見つめて、溜め息を付く。

「どーしよ…。」

突っ立っていても仕方ないので、なんとなく歩き始めた。

「…にしてもあいつ！しかもなんでよりによって実家の近くなわけ？」

ぶつくさ言いながら歩き続ける。思い出すとまた腹が立ってきた。

「！！」

何かの気配を感じ、振り返ると電信柱の影に隠れ…きれていない、例の男を再び発見した。人は一度怒りを爆発させると、その後はより切れ易くなるものだ。

「…。もういい！いーわよ！わかったわよ！出てきなさいよ！！分かってんのよこっちは！！」

私も例に漏れず、切れながら男に歩み寄って行く。今まで逃げていたはずの相手に、急に近付いてこられた男は慌てていた。

「あんた！そう、あんただよ！…あ！そうだ、あんたあの女どこ行ったか知ってんでしょ！？教えなさいよ！！

コラ！！」

詰め寄る私、あたふたする男。すると背後から声が響いた。

「動くな！」

数人が後ろから走り寄ってくる音が聞える。

「えっ？」

警官だ。走ってくると、私と男を揉みくちやにする。

「新宿通り魔殺人容疑で逮捕する！」

「ご、ごめ…。」

私が条件反射的に謝ろうとした時、誰かが男のサングラスとマスクを取った。

「スズキだな！まったくこんなところまで…。」

「えあ！？ス、スズキさん！？」

「沢木唯さんですね？あなたにもお聞きしたいことが。」

「は、はあ…。」

「この、スズキはご存知ですね？」

「…はい。…っと、店の常連で…。」

「ええ。あなた、ずっと狙われていたんですよ。無事で良かった。まあ、とにかく署までご同行ください。」

あの後、任意の事情聴取だったため、私はその日のうちに帰された。廊下で待っていたのは両親。呼んだことは聞かされていたので驚くことはなかったが、今更ながらに泣いてしまった。それよりも驚くべきは二人が別れていないことだった。母はあの翌日に私が出て行ったことに気づき、離婚を考え直したのだ。それを境に父は院長を退き母に経営権を譲って、今や立派な主夫をしている。私は復学し、歩むはずだった道をひた走っている。

数ヶ月が経った今、私の部屋の隅には、あのバットが立てかけてある。逮捕された連続通り魔…常連のスズキさんは、私を指名した男を襲っていたのだそう。奴を刑事と思い込んで逃げていた私達は、実はスズキを連れて警察の捜査を攪乱していたようだ。その上被害者の中にセージはおらず、警察にはセージと凜の件は黙っていた。というか、聞かれもしなかったのだ。警察の話には私と犯人以外誰も登場してこなかった。もしかしたら、違う事件として扱われているのかも知れない。そう思い迷った末、セージのいたホストクラブに問い合わせると、セージは辞めたが生きていたらしい。ちゃんとニュースを見ていれば、逃げることはなかったのだ。複雑な気持ちだが、まあいい。もう会うこともないだろう。そして…、凜。暫くしてあのボロアパートを訪ねてみたが、取り壊されて持ち主も代わっていた。不思議なことに取り壊しは私が凜に連れて行かれる2ヶ月前には決まっていた、住人は皆他に移っていた。その中でも凜の記録はなかった。働いていた店もオーナーが代わって分からずじまい。思えば、名前さえろくに聞いていなかったのだ。どこまでが本当だったのか…、いや、むしろ本当にいたのかも定かではない。そういえば『妖精さんだもん』とか言ってたな…、いや、それは絶対ない。あの性格でそれはない。妖怪ならまだしも…。結局、奴の痕跡は私の記憶とバット以外に何も残っていない。バットを手にとって凜の顔を思い出した。面倒臭いし、言動の意味が分かんない奴だったけど、結果的に凜がいなければ今の私は無い。

「喧嘩なんかしなきゃ…ん？」

持ち手の下を覗き込む。

「…。」

良く見ると擦れたマジックで『ひのせ りん』と書いてある。

「ひ…のせ！？」

あの封筒を思い出す。私が出たあの日、母親が父親に叩き付けたあの封筒。『別れさせます！HINOSE探偵事務所』。まさかね…。…いや、有り得るかもしれない。

「ちょっと！？お母さん！」

暫くして、私は家から飛び出し、全速力で走った。

「何が妹…。くっそー！はめられたー！」

ストーカー

“プルルル…”

「はい、日之瀬探偵…。ああ！沢木さん。…いえいえ、ご無沙汰してます。唯ちゃんはどうですか、その後。…そうですね。良かった。まったく、ウチの娘ときたら、家に帰るのが目的とはいえ荒い仕事っぷりで、本当に申し訳ありませんでした。…いえいえ…。ところで今日は…。はは…。そうですね、わかりました。お待ちしております。」

“ガチャ”

「たっだいま～。はぁあー。疲れたー。お父ー。もう、やだよ。身辺調査～。つまんないよ。もう飽きたー。」
凜はドサッと自分のデスクに座った。

「何言ってるんだ。得意だろうが、ストーキングは。唯ちゃんの時なんかほぼストーカーだったぞ、お前。」

「だって、唯ちゃんのは、本当に私ストーカーだったんだもん。」

「開き直ったか。」

「お母死んで、お父んとこ越してから、ずっと週末様子見に通ってたんだよ？ライフワークと言っても過言じゃないね。」

「なんで声かけなかったんだ？小さい時は良く遊んでたじゃないか。」

「だってさあ、なんか素直に育ってて、友達多いし、私なんか忘れてそうなのに、改まってなんて声かければいいんだよ？実際、会っても全然気がつかないし、一緒に撮った写真見ても、『それ妹？似てないーい、妹のがかわいいー』とか言って。それ自分だっつーの。確かにかわいいけど。」

デスクの写真立てを取る。

「拗ねるな。気付かれないように騙してたのはお前の方だろうが。」

「嘘は言っていないもんねー。歳以外は…。しかも、小さい時の私、男だと思ってたんだよ。ひどいよお。」

「そりゃ、髪短くて、常にバット持ち歩く悪戯好きが女に見えるわけないだろ、唯ちゃん四つか五つくらいだったんだから。」

「だってバット好きなんだもん。あーあ、あげるんじゃないか。」

「戻ってくるかもよ。」

「え？なんつったの？」

「いや、ちょっと買い物行ってくれるか。」

「はいはい。何買えばいいの？」

「なんか、お客さん用に果物とか、適当に。」

「了解～。」

サイゴニ

私がバスを降りると、見覚えのある女が買い物袋を方手にバス停を通り過ぎた。その女がふと立ち止まり、振り返る。私は二度見してそれが凜だと気が付いたと同時に、凜も私が私だと確信した。

「あ」

二人とも、口を半開きにして人の往来の中を立ち尽くす。私が一步踏み出した途端に凜は身を翻して走り出した。

「ちょっ…待てー！」

物凄い勢いで逃げる凜。しかし途中で私が追いついた。

「早っ。」

「今日は荷物無いから！」

喋りながらも止まろうとしない。負けたくないのはお互い様のようだ。商店街を抜けて公園に辿り着くと、二人とも座り込んだ。

「はぁはぁ…、に、逃げるな！」

「だって、お…追いかけるんだも…。」

「お前は犬か！」

「トムとジェリー。」

「それはネコとネズミ。」

「…で？どこまで分かった？」

「全部。」

「野球少年じゃないよ、あたし。」

「あんなの女と思う方がおかしいから。」

「全部ばれちゃってる？」

「ばれました。あんた、スズキが通り魔なのも知ってたんでしょ？」

「うん。毎日仕事帰りにゆいっちが襲われない様に、バット持って後付けてて、なんかもう一人ゆいっちの後付けてる奴がいると思ったら、常連のスズキでさあ。暇つぶしにあいつの後付けてみたら殺人犯なんだもん。そりゃあもう驚いたね。」

「…通報しろよ…全く。…あ、後、工作料の代わりにうちのクリニックで豊胸したことも聞いた。」

「そんなとこまで!？」

「あ、ひとつわかんないのが…。」

「なにになに？」

「歳、ほんとは、いくつ？」

「それは…。いくつに見える？」

「…。教えないとバット捨てるよ。」

「ご、ごめんなさい…。」

私は地べたに寝転がって、田舎の青空を見た。ここの空は、何にも拘束されていない。視野の端まで空が続いている。

「ま、いいけどさっ。」

歳を言おうか迷っている凜に笑いかけた。

今になって思う事がある。逃げるのも戻るのも、負けたと思う事も悪い事じゃない。その途中、何に気付くかで人生は決まる。